

商業出版社からの学術情報発信

エルゼビア・ジャパン代表取締役 深田良治

私は、ヨーロッパ初の商業出版社がやっている学術出版の過去十年ぐらいの変化について話します。

世界のSTM(サイエンス、テクノロジー、医学)の分野の中でピアレビューされた論文が、年間100万件くらい作られています。論文誌のタイトル数では、1.5万件くらい、出版社とか版元の数全部合わせると2,000社くらいです。

また、世界では100万件の論文が出版されます。これは、毎年3%ずつ増えてきています。今年が100万件とすると、次の年には103万件と、情報の量が毎年増えているわけですが、その中の25%がエルゼビアです。一論文あたり平均して2人とか4人での共著ですので、50万人くらいの世界中の著者に、商業出版社としてサービスを提供していると言えると思います。日本の論文は2.5万件で、一つの論文が10ページとしますと、大型の百科事典10セットくらいのコンテンツ量が日本から海外に出ています。これを流出していると取るのか、それとも日本の研究者の仕事が海外で知られていると取るのか、すごく微妙です。STM分野では、なぜ、日本がナショナリズムに固まって、全部日本発でなければだめだと学者の先生方が言われるのか、私はちょっと理解しかねるところがあります。日本は勿論日本という国ですけれど、OECDの中では非常に重要なパートナーですから、そういう世界の市民の一人という、そういう自覚も、観点も、あっていいのではないかと思います。この規模のコミュニティに高品質でかつ均質的なサービスを続けて提供していくことは、すごく責任重大です。勿論お金もいただいていますから、価格が高いと言われていることも解りますが、それに伴う責任は非常に重大です。私どものアメリカ本社のカレン・ハンターという、元ライブラリアンで割と辛口の副社長がよく言う

のですが、エルゼビアが持っているコンテンツは、決してエルゼビアだけのものではない、科学の議事録なのだ。科学コミュニティがいろんな事をやり、それを書いている。これと私どもでは「the minutes of science」と呼んでいます。そういう意識がエルゼビアの社内にもあります。それをこういう場所とか、アメリカの学会とかで出来るだけお知らせし、解っていただくように努力しています。

2004年には約1,800種類のプライマリージャーナルとレビュージャーナルを出版しています。その中には確かに、アメリカの国の予算から学会にお金が渡って、その結果をいただいているというジャーナルもあります。FEBBSという有名な全ヨーロッパ連合の学会誌も出版しています。ですから、海外の出版社が日本に来て、日本の学会誌を盗って行っているというように見えると思いますが、それは別に日本だけではなく、ヨーロッパでもアメリカでも同じようなことをやっています。それから、エルゼビアは、勿論ジャーナルだけではなくて本も出版していますし、現在ではサイエンス・ダイレクトというサービスが、今一番良く使われています。それ以外に、同じサイエンス・ダイレクト上のプラットフォームで、書誌データベースを持っていますが、2,000万件の抄録と1.2万誌のインデックスが入っています。

ここで、エルゼビアが考える学術情報環境を説明したいと思います。まず、著者が入ってくるAuthor Gatewayというのがあります。これは、著者をサイエンス・ダイレクト上で支援する新しいサービスです。その次に、サイエンス・ダイレクトがあります。サイエンス・ダイレクトは、一次情報の中身が乗っているプラットフォームです。勿論、それ以外にも他の出版社がやっている電子ジャーナルもございます。さらに学術情報では重

要なグレーリテラチャーとかデータセット、マルチメディアファイルなどもあり、そういうものが研究環境の中では使われており、これからも使われていくと思います。それから、Scopus(スコーパス)というものがあります。Scopusはただ今準備中の二次資料のデータベースです。それと、Scirus(サイラス)というものがあります。これはYahooとかGoogleをサイエンスに特化した、サイエンス専用のサーチエンジンです。YahooでDOLLYと入れると、多分ドリー・パートンというカントリー&ウェスタン有名な歌手が出てくるのですが、ScirusでDOLLYと入れると、ドリー・ザ・シープといって、イギリスで4年か5年前に出たクローンシープの話が出てきます。何かを探す場合はScirusで見れば、科学関連のことが解ります。Scirusは確かにエルゼビアが動かしているサーチエンジンですが、広告が入っているわけではないし、エルゼビアの内容だけを見せているわけではありません。勿論サイエンス・ダイレクトへの入口という意味がありますが、Scirusから入って、他のところに行くこともありますので、特に科学だけを探すときには、Scirusは良いと思います。これもサービスの一つです。それから、一次資料がプレプリントとか、機関レポリトジとか、いろいろなところに分散するようになり、自分が見なければいけない論文がどこにあるのかを探すことが必要になります。情報の供給と需要のギャップがどんどん大きくなるので、それを埋める新しい道具が必要になってくる訳です。それがScopusであり、これから作ろうとしているKnowledge Managementというシステムです。

私がよく本社ではというお話をすると、「深田さん、よくわかったけれど、日本では何してるの」と言われることがあります。一つは世界最新で最高レベルの情報を日本の研究者にお届けする仕事があります。昔は紙だけでしたが、最近はサイエンス・ダイレクトという受信基地を使って、日本のユーザーに見ていただいています。また、反対に日本の研究成果とか情報を世界の舞台に持っていくという仕事があります。それから、Author

Gatewayという装置を使い、サイエンス・ダイレクトの上で論文を提出したり、ピアレビューをしたりすることを今開発中です。近日中にはサイエンス・ダイレクトの上でそういう論文のやり取りが出来るようになります。

エルゼビアのビジョンとしては、科学の発展のために、研究者の最適なパートナーでありたい、情報のアクセスを出来るだけ広く多くの方に使っていただきたい、と考えています。勿論需要と供給の関係がありますので、お客様の声を聞いて、それに応えられるように進化することが必要だと考えています。それから、図書館と出版社の役割というのは相互協力が必要ですので、大学や研究所の情報戦略を担われる図書館の方と色々お話しして、これからどうすればいいかということをお客様が聞いて、本社に進言していくように持って行きたいと思います。

ここ十年くらいの間に変わったことの一つに、アナログ時代とデジタル時代のコピーがあります。アナログのフォトコピーはあくまで複製で、10回とか20回とかコピーすれば、同じものではなくなるのですが、デジタルコピーは再生産で、まったく同じものを別に作ることになります。例えば音楽のデジタルのファイルをコピーしたとすると、何十回、何百回やっても、同じ内容のものができるわけです。ですからフォトコピーとデジタルコピーは、やっている作業は似ているけれど、内容は違うのだということをみんなが解っている必要があります。残念ながら、まだデジタル上の著作権がどうあるべきか、というのは法律としては整備されているとは言えません。これからどうなるかは、図書館とか、研究者とか、いろいろなコミュニティが社会と話をして、それで法律家が動いて、後を追っかけて整備されていくものではないかと思っています。

エルゼビアで出版されているジャーナルをどういうふうに使えばいいかということが、十年くらいの間にいろいろ変わりましたので、パンフレットを準備しています。パンフレット中に、どういう時に使っていただけるか、例えばコースウェア

として使えるとか、著者バージョンでWordやTechファイルの論文を自分のホームページの上で掲載したり、PDFを同じ研究をしている仲間を送ったりすることは今のサイエンス・ダイレクトの契約上可能ですとか、機関レポトリジに掲載されることも可能ですとか、そういうことの詳しいことが出てます。

これからの可能性として、オープンアクセスがあちこちで言われています。オープンアクセスをどのように考えていますか、と言われることが多いですが、私達はオープンアクセスがヨーロッパでもアメリカでも日本でも真剣に話をされているということはよく解っています。それをすごく真剣に細かく慎重にウォッチしています。どういふ所でどういふ発言があつてどういふ動きがあるかという事を見えています。カレン・ハンターがNatureのインタビューで言っていることなのですが、マーケットがオープンアクセスを選ぶということになれば、エルゼビアは商業ベースの出版社として、例えば来年とか再来年とかにオープンアクセスに動くこともできます。ただしマーケットというのがすごく広い概念ですので、日本のマーケットはそうだけど、中国は違うということがありますと、なかなか動けないかもしれません。

私どもが懇意にしている窪田輝蔵さんと言う方、1996年にユージン・ガーフィールドの伝記『科学を計る』という本を書かれた方で、彼が最近ある大学で講演した際に使った文を、本人の許諾を得て使わせていただきます。「これからはいろんなビジネスモデルの競争になるだろう。それぞれのモデルには存在理由があるのだ。どれか一つ最後に勝つということは、ひょっとしたらないかもしれない。オープンアクセスもあるけれど、従来の商業出版のモデルもあるだろう。」彼が言っているビジネスモデルとは、一番目がオープンアクセス、二番目がエルゼビアのような商業ベースのビジネス・データベースというものの、三番目がホームページの上で展開される個人的なジャーナル。窪田さん流の分け方でこう言っていますが、どのビジネスモデルが勝つということはないかもしれない。これから順番に競争になっていくもので、それこそ電子ジャーナルの時代じゃないか。ただ商業主義はいけないというドクトリンを振りかざして競争をなくすというのが、それがいいのか悪いのか。多分窪田さんの言い方ですと、これは間違っているのかもしれない。私もこの意見に同調いたします。

(ふかだ りょうじ)

シンポジウムに参加して

—大きな不安といくつかの期待と—

京都大学大学院農学研究科教授 野田 公 夫

私は農業・農民・農村の近代史を専門にしております、電子ジャーナルもデータベースも利用したことはない。しかしIT化が爆発的に進行するなかで、「知」の発信や蓄積および利用のあり方はどうなっていくのか…半ば図書館協議員という役目から、そして半ば文明論的関心も手伝ってシンポジウムに参加した。想像を遥かに超える深さと広さをも

った革新が進みつつあることはよくわかり、私のこれまでの通念はまさに一変させられた。

今回のシンポジウムでは、専門領域を異にする方々が各々の図書館像を語るという形式がとられた。一つ一つのお話はまことに興味深かったのだが、他方では、過渡期（定まらぬ現在）というものに固有の危うさをみたような気もした。それは、